

---

**助けてください。**

ハルカ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

助けてください。

### 【Nコード】

N3439Y

### 【作者名】

ハルカ

### 【あらすじ】

何かに本気で取り組む時。そんな時に限って不幸になる私。でも、憧れの大学生活も始まったし、これからの人生は幸せが待っているはず。じゃあ、幸せになるために、まずは人生初めての彼氏でも作ってみよう。

なんて気合い入れたせいか、とんでもないもの（人）を引っかけてしまった。

いや、あなたは私には荷が重すぎるのでスルーさせていただきます。  
ついてこないで。物陰からこっちを見ないで。私の愛用品をこっそ  
り持っていかないで。

てか、誰か助けてください。

思えば、私って昔からついてなかったと思う。

…いや、運がだよ。道歩いてて上から鳥の〇〇がっつてのはあつたけど…おにゅーの服がぐしゃどろになってめちゃくちゃへこんだけど…って、そっちじゃなくて、ラックの方。

幼稚園の時は、遠足で楽しみにしてたお弁当に毛虫落ちてきて、ひっくり返しておじゃん。

小学校の時は、マラソン大会で何故か車にひかれそうになるし。(ほぼ毎年)修学旅行では迷子になるし。

中学校の時は試験前に必ず愛用のシャーペンが紛失or破損。修学旅行では迷子になるし。(2回目)

高校の時は張り切って作った手作りチョコをこけた拍子に側溝にポイ捨て。(ちなみに、友チヨコ)修学旅行では迷子になるし(3回目)

そして1番不幸だったのが大学受験の時。その日に限って目覚まし時計が壊れて、遅刻しそうな中、死に物狂いで受験会場へ。

大学受かったのが、嘘みたいだった。絶対落ちると思ってたし。ついてない事ばかりだけど、神様は頑張る私を見ていてくれたんだ！今まではついてなかったけど、これからはバラ色の人生が待ってるんだ。私は、そう信じて疑わなかった。

だって、念願の1人暮らしだし。憧れの大学に入れたし。親友も一緒の大学に受かったし。うん、言うことなし。楽しい明日が待って

るぜ！

「なーんて、やっぱり私の人生上手くないもんだね」

ずずー。適度に混んだマツ〇でコーラをすする様に飲む。

「やめなさい。バカっぽいから」

「だってー…」

私の前でハンバーガーをパクつく幼稚園からの親友。（幼馴染みでもある）

艶々の茶髪を綺麗に巻いて、バッチリメイクにスラッとした体。

彼女は佐々木 唯。不幸体質の私を影から日向から支え続けてくれる姉御肌の美人さん。

私にお弁当半分わけてくれたり、突っ込んでくる車から助けてくれたり（私を蹴り飛ばして）、代わりに友チヨコ買ってお金貸してくれたり、毎回シャーペン貸してくれたり迷子の私を探しだしてくれたり。

…もう本当に、唯様々です。

唯は私にとって、女神と言っても過言じゃない。

助けられまくり。唯的には、私は「出来の悪い妹」らしい。…姉さん、あざっーす。

でも、私ももう大学生だし。唯に心配と迷惑ばかりかけるのも申し訳ないって思うし。ここらで独り立ちをしなきゃな、なんて考えた。…遅いかもだけど。それで、唯に大人になったねって言わせて、安心してもらおうのだ。

その為に、唯に相談中。

「私から自立しなきゃって考えは良いと思うよ、知恵里。でも、なんで彼氏作りが独り立ちなのよ」  
訳解らん、って全力で語ってるよその顔。

「だって、『大人の女』って彼氏の1人や2人や3人いるものじゃん」

「…知恵里の言う『大人の女』、激しく間違ってるでしょ。良い女はたった1人を深く愛するものよ」

「じゃあ1人にする」

「……」

あんだ、バカ？って全力で語ってるよその目。

「やめときなよ。知恵里が本気で頑張る時って、何かしら起きるんだから」

さすが、女神はわかっていらっしやる。めっちゃくちや気合い入れた時とかやる気出した時に限って、不幸が起こるんだよね。

「でも今のところ、何にも不幸になってないし」

にへつと笑う。

「甘いわね。本気で彼氏作るうって思っ  
てないからよ」

ふふん、と鼻笑う唯。不適な笑みが  
すんごく似合ってるし。

「すんごく気合い入ってるんだ  
けどな」。毎日化粧して、スカート  
はいて、かかとの高い靴はいてるし」

「それ、だいたいの女子の標準装  
備だと思うけど」

「……」

私的には、めちゃくちゃ頑張って  
るつもりなの。女神の唯様の女子  
力には遠く及ばなくとも。

「どっかに彼氏落ちてないかな……」

ずぞぞー

「バカにしか見えないから、変な事  
言っつのはやめなさい」

ハンバーガーを食べ終わった唯に  
引っ張られて、渋々店を後にした。

「ありがとうございましたー」

やる気ないような店員の声に見送  
られて、自動ドアがしまった瞬間。

何故か、ほっと息をついた。

「何、あからさまな溜め息」

眉を寄せる唯。地獄耳だし。

「なんだか、店の中で変な視線感じてさ。また唯狙いのおじ様の熱い視線かな」

「私は何も感じなかったけど？」

「多分慣れてるからでしょ」

「バカね、知恵里よりは鋭いんだから。何回あんたを色んなものから助けたと思ってるの」

「感謝感激雨あられ…」

「それ懐かしくない？…まあ、気のせいでしょ。にぶちんの知恵里が気づいて、私が気づかないなんて有り得ないし。」

「

「ういーむっしゅ」

「……」

気のせい。その言葉に安心してしまっていた。

私が本気出した時の不幸、舐めてたかも…

新歓オリエンテーションが終わって、やっと説明やら勧誘やらから解放された。ちなみに、晩ごはんも一緒に！って私の腕を掴んで駆け出そうとする唯をやつとの思いで振り切り、1人とぼとぼと帰路についた。

いや、色々な事あって疲れたからさ。ちょっと1人になりたくて。

「疲れた……」

アパートまでの徒歩15分が長く感じる。ちえっ、今度自転車で買おうかな。

……ん？

視線を感じる。

ちらっ

足を止めて振り返ると、さっき曲がった電柱のある曲がり角に、黒い影。

ちょうどよく、逆光になって何がいるのか見えない。人だっつのはシルエットでわかるけど。

……えっ。

まあ、気のせいかな。うん。……早く帰ろう。

サカサカと早くなる両手足。まるでゴキ〇リみたいな私。

ちよつと歩いて、またちらつと見ると、しゅばつと何か（誰か）が動いた。

……えっ。

やばい。不審者だろうか…私みたいな平凡でも、襲う気になるの？

さーっとながら血が引いていく。やばい、逃げなきゃ。

一目散に駆け出す。ともかく、逃げなきゃって事しか頭にない。

後ろから、何かも追ってくる気配がする。怖い。なんで追ってくるの?!

足をもつらせながら、必死で駆ける。

あの曲がり角を曲がれば、アパートが見える。

逃げ切れる。

そう思って少し安心したのがいけなかったのか。

角を曲がった瞬間。

ずしゃっ

派手にこけた。

こんな時に不幸モード発動！？そんな、追いつかれるっ…！

恐怖で足がすくんで、立ち上がれない。役たたずな足。

もう、追ってきた誰かはこの角を曲がるかもしれないのに。

怖い。怖い。怖い。

ガタガタ体が震えだした。その時。

角を曲がって、男が飛び込んできた。

「きゃ……っ！……！」

悲鳴をあげようとした唇に、何かがぶつかってきた。

さっきの男だ！走ってきた勢いそのままにぶつかってこられて、私はふつとばされ……なかった。

あれ？

なんか、体を抱き込まれて…守られてる？そりゃあ、勢いすごかつ

たから軽く飛ばされたけど、男が腕を差し込んで地面との間にクッションになってくれたから、痛みは軽減されたみたい。

「わ、わるい！まさか転んでは思わなかった。大丈夫か？」

至近距離でわめく男。いや、近い。いやそれよりも、今…

「きす、しちやった…」

ぶつかって、2人でふつとんで、衝撃にぐつと息が漏れて、その後、ふにやっとしたものが唇に。

目を開けたら、あらまあ、目の前に超イケメンが。

「…………えっ」

不審者がイケメンでそのイケメンがぶつかってきて唇と唇がジャストにミートしちゃってふにやっつぶちゅっときすが…

「おろ…？」

知恵里は目の前が真っ暗になった。



さら、と髪を撫でられる感覚。それとふにつ、と額に何か柔らかい物も触れたみたいな。

…また、髪に触れられる。今度は頬に柔らかい感覚。くすぐったつ…

「……………んっー？」

すりすり、と擦りよってみる。そうすると。

ふっ…

低い声の笑い声。あれ、なぜだか聞いた事ある気が。しかもついさつきとか。

ぱちっ

薄目を開けてみる。白い天井。ダリアの花が広がったような、上品な照明。

私ん家、こんなオシャレライトあつたっけ？…あれ、照明の紐にくくりつけた、夜光くんがない。あそこ、電気消したら光るから大切にしてたのに。

「や、こっ…くん…」

ひも切れて落ちたのかな。

って言いたかったんだけど。

「…………えっ」

がばっ、と何かにのし掛かられて。しかも上から両手を押さえつけられてしまった。

かち合ったのは、私を射抜くような強い眼差し。さっきのイケメン！？

「や、なに…っ」

「やこつくん、とは誰だ」

知らんがな。

「えっ、ちょっと…えっ？」

やばい。頭がパニックっているね！ニセ中国人みたいになってるし。

「いやいや、あなた誰？しかもここどこ？ていうか、離れて！」

近い！無駄に近い！

鼻先がふれあいそうな程近くに詰め寄られて、変にドキドキする。私、この年までお付き合い経験0のぴゅあがるなんですからね。

異性とこんな鼻息感じそうな程に距離詰めたの初めてですから。

「やこうくん、が誰か話したらどいてやる」

あなた、めっちゃくちや偉そうですね。

「えっ……やこうくんは、暗いところで光る夜行性なステキ男子の人形、だけど……」

恐る恐る、イケメンの鋭い目を見ながら答える。私、とって食われそう。頭からがぶりと。

「……人形」

鋭い目が、険しい色を少し緩ませる。

「うん、人形ですね」

彼はそれ以上でも、それ以下でもないんです。

わかってくれたかな？と、イケメンをじつと下から（状況的に、そうなっちゃう）覗き込む。

はっ、と目を見開いたイケメンが、かあっと真っ赤になった。

うわ、耳まで赤くなってる。

イケメンは、しゅばつと勢いよく私の上から跳ね起きた。わお、勢いよすぎてベッドが、がたんって言った。

びっくりして、思わず私もベッドから上半身を起こす。  
その時、右肘に鈍い痛みが走る。

「いつ…」

なんだろう、と肘を撫でると、湿布が貼つてあるみたい。

…そういえば、けっこう吹っ飛んだもんな私。このイケメン、どう  
いう訳かかばってくれたとはいえ、打ち身くらいはあるよね。

まあ他はこれといって外傷はないみたい。軽く体を撫でて確認。

よし。

「で。……あなた、誰ですか」

跳び退いてベッドの端に居たイケメンを、きつと睨み付ける。…ま  
だ顔赤いし。イケメンは、私と視線がかち合うと、私の足元にとす、  
と足を折って座り、両手について頭を下げた。

「……………えっ」

土下座?...うん、土下座ですね。

どうしよう。今すぐこの場から逃げ出したい。

しかも、土下座するだけしといて、何も言わないしこの人。

なんかやっぱり怖い。

「あの...」

「俺と結婚してくれ」

居たたまれなくなつて、声を掛けたと同時に、  
耳を疑う様な言葉が聞こえた。

いやまさか。聞き間違いでしょう。

嘘でしょう、という雰囲気相手が相手に伝わったのか、

「結婚して欲しいんだ。俺と」

もう一度、おっどろきーな事を言われてしまった。

「……………はい？」

「…それは、承諾してくれたと受け取って良いのか」

がばっと、頭を上げるイケメン。

いやいや、結婚とか嘘でしょう。なんだかおかしい方向へ進んでないですか。

「えっと、話がわからないんだけど…」

あれ、いつの間にか、イケメンがじりじり迫ってきてる。

ベッド上で後ろに逃げたはずが、とん、と背中が壁にぶつかる。

やばいかも…

今さらながら、逃げ場を探して部屋を見渡す。

白と黒で統一された、生活感のない殺風景な部屋。

奥の方に、茶色のドアが見えた。

あれは…玄関だ！あそこから逃げられる！  
どうやら、ここはワンルームアパートの一室らしい。ずっと目の前のイケメンから目が離せなかったから、今頃周りの様子が頭に入ってくる。

逃げなきゃ、と体を起こそうとした瞬間。

とん、と肩を優しく壁に押さえつけられた。

はっとして私を壁に押し付ける腕の先を見ると。

キラキラした、熱い眼差しとかち合った。

一瞬、その眼差しの強さに見とれて 捕まった、とまってしまった。体がびくりと硬直するのがわかった。

だからなのかも、しれない。

「知恵里…」

掠れた声と共に、もう一度唇を重ねるのを許してしまったのは。

「んっ…や…っ」

熱い唇が押し付けられる。逃げても、また唇をふさがれて、吸い付かれる。

キスの合間に漏れる吐息が艶めかしくて、どんどん体が熱くなっていくのを感じる。

嘘。こんなの知らない。

キスって、もっと可愛いものだと思ってた。こんな、激しくて、苦しいものだったなんて。

「や…っ！」

必死に顔を反らして、彼から逃げる。

ちゅっ、とリップ音を残してようやく私の唇は自由になった。

はあ、と吐息がこぼれた。キスの間中、ずっと呼吸が上手くできなくて、苦しくて仕方なかった。

彼は荒く呼吸を繰り返す私の髪を優しく撫でると、また唇を寄せた。

「やだっ」

押し返そうとする腕を掴まれ、拒絶の言葉を吐こうとした唇を再度ふさがれる。

びくつと、体が固まった瞬間に、唇を少し開いてしまった。それを逃さず、する、と何かが入ってくる。

!?

まさか…っ。

そんな、と思ったと同時に、入ってきたそれを噛んでしまっていた。

「…っ！」

口を押さえて、私から離れる彼。

舌に感じる血の味に、彼を傷付けた事を知る。

「わ、私…：謝らないっ、から、ねっ…?!」

ぜえぜえ息を乱しながら、彼を睨み付ける。

彼は、私を見つめたまま動かない。熱に浮かされた様な、うっとりとした目をしながら。

ぞくつ。

寒気を感じたのは、絶対に気のせいじゃない。

「すまない……」

……？

イケメンの意外な言葉に、私は眉を寄せる。まだうつとりとした表情は変わらない。…言葉と表情にギャップがありすぎる。とても人に謝罪をしてる顔じゃない。

「知恵里はキス、初めてだったのか。…初めてじゃなかったら、相手を殺しているところだったが。…初めてだというのに、無理をさせて悪かった。息の仕方わからない、知恵里の初な反<sup>うぶ</sup>応が可愛すぎて抑えがきかなくなってしまった。すまない…それと、俺を噛んだ事は気にしなくていい。お前の体内に俺の血が混じるだなんて…夢のようだ……」

えっ…。

私、耳壊れたかもしれない。もしくは、脳味噌が沸いてしまったのかも。

だって、意味わかんないんですもん。

ぼけっと放心している私を、イケメン、いや、変態がそっと抱き締めてきた。

「いきなりで怖かっただろう…大丈夫だ、俺はこれ以上は知恵里がいいと言うまで待つつもりだ。最後までいかなくとも、愛を伝える術はある。」

………はい?!

「今度の休みには知恵里のご両親に挨拶に行こう。結婚を真剣に考えている事を伝えておきたい。」

えっ?!

「ご両親の承諾がとれ次第、これを役所に出しに行こう」

さっきの艶っぽさとは大違いで、背後に花でも背負っていきそうな笑顔を浮かべて、変態がベッド脇の書類棚からいそいそと白の封筒を取り出す。

更の中から二つ折りの紙を取り出し、ぺろんと私に広げて見せる。

…これ、婚姻届じゃないですか。しかも全部記入済み。（妻の記入欄に私の氏名住所生年月日その他諸々まで全て完璧に！判子まで押してある！）

私、あなたに会ったのは今日が初めてじゃなかったっけ？

「知恵里？」

大口開いて、ぽかんとする私をじっと見つめる変態。  
いつの間にか、獣のようだった強い眼差しが、優しい眼差しに色を変えている。

「私、あなたと会った事あったっけ…？ていうか、婚姻届…」

放心状態でぼそぼそ話す私。もはや茫然自失とはこの事が。  
茫然なう。  
私なう。

なうなう…現実逃避してしまうくらい、私は混乱しているみたいだ。

呟き程度の言葉をしっかり聞き取っていた変態は、目を細めて

「実際に会うのは今日初めてだ」

と、のたまった。実際って何。今までの人生であなたと接触もしくは視界に入れた記憶は1ミクロンたりともないんですけど。  
はあ？って顔してたのを読んだのか、

「…悲しい事に、知恵里は俺がいつもそばにいたことに気づいていなかったからな…」

そんな悲しそうな顔されても。…全く、記憶にございません。一体、いつどこにいたのか。

わからない…と頭を悩ませていると。

変態は、またベッドの端に戻ってあぐらをかいた。長い足を組んで、ふう、と溜め息を一つ。

「知恵里は、危なっかしいからな。いつも見守っていた。時には、物陰から。時には、10歩後ろから。知恵里の頭上目掛けて落ちてきた鳥の糞を、知恵里に当たらない様に処理したり。知恵里に声を掛けようとした男を処理したり。ああ、知恵里のアパート周辺と通学路は、知恵里が大学入学前に整備させておいた。

目を離すと側溝にはまっていたりするからな。他にも、色々…」  
「なやり、と色気をにじませて口許を歪める。

な。じゃないからっ！！！！！

色々聞きたくない事とか聞いちゃった気がするし…！  
ていうか……

「あ、あつ、あなたいつから私を知ってるの？入学前からって…そ

れに、こ、ここ婚姻届！なんで私の情報知ってるの？勝手にあんなの書いて…犯罪でしょっ!？」

興奮のあまり、口が回らなくなってきてる。何故か、もう怖さよりも単純に怒りが沸き出てくる。

この変態が頭おかしすぎるせいか。

「落ち着け知恵里。あまり興奮すると体に毒だ」

「あんたが興奮させてるんでしょ!このっ、変態…!だいたい、さつきから知恵里知恵里うるさいっ!…勝手に人の名前よばにやいでっ!」

気づいたら、ベッドに仁王立ちで怒鳴ってた。顔は真っ赤で息も乱れてぜいぜいしてる。

こんなに怒りでいっぱいになって、大きな声を出したのは人生初かもしれない。

肩で息をしながら、変態を睨み付ける。奴は足を組んだまま、顔を真っ赤にして…真っ赤に……て、え、ええ?!まだシリアスなシーンだと思ってたんだけど私?!

変態は真っ赤な顔を片手で隠し、

「くそ、反則だ…知恵里が俺に興奮してくれるとは…しかも、最後

で嘔むなんて…くっ、可愛いすぎる…もういつそこのまま最後まで…いや、落ち着け…」

何やらぶつぶつ呟いてるけど…ああお母様、今だけはこの地獄耳を授けてくださった事を恨みます。

## 7 (前書き)

ご感想、たくさんのお気に入り登録、ありがとうございます。

とりあえず…変態が自分の世界に浸っている間に、逃げなくては。

ベッドから飛び降りた私は、さつき確認した玄関のドアまで、一目散に駆ける。

後ろから、「あっ」って聞こえた気がするけど、もう遅い。私はドアに手をかけている。

逃げなきゃっ…

ドアノブを握る。(あ、もしかして鍵かかってたかも！やばい、鍵解除する時間すらもつたいないのに…)と内心焦った。  
私は一瞬でも早くここから(あの変態から)逃げたい。

ガチャッ…

あ、開いた！？もし鍵かかってたら…ってヒヤリとしたけど、ドアは簡単に開いた。

逃げなきゃ

勢いあまって、ドアが跳ね返ってくる程の力で、押し開けた。ドアの向こうは、

毎日私が自分の部屋から見る風景と、同じでした。

あ、あれえ？

一瞬、ほけつとする。え、ここ私の部屋だったの？…まさか！今日朝に家を出た時にはまだ、普通だったはず…

頭が真っ白になった私は、ドアを開けたポーズのまま玄関に立ち尽くした。

「知恵里が入学したと同時に、引っ越してきた。知恵里の部屋で暮

らそうと思ったが…お隣さん、という響きも捨てがたくてな。隣を借りた。」

後ろから、ぎゅっと抱き締められる。

「へ？お隣さん…？」

隣か。隣だったのか。道理で玄関開けても同じ景色が広がってる訳だ。

あ、よく見るとお向かいの家の角度が若干違うような…

しかも私の部屋に住む気だったの！？何家主に承諾なく計画しちゃってるの！？

じゃなかった、また捕まってるし私！

「離して！ひやあつ、や、やめてよ変態！」

お腹に腕を回されて、大きな手ですりすりと撫でられる。首筋をペロりと舐められ、その後ちゅっ、と吸い付かれる。うっ、鳥肌が…もしかして、もしかしなくとも、これが貞操の危機ってやつでしようか。

生まれてからずっと色恋に興味がなかったとはいえ、大事に大事に守ってきた処女を、こんな変態に奪われていいの？そんなの、いいわけないっ！

「この不埒な手を離しなさいっ！」

力の限り暴れる。なのに、全然びくともしない。肘でお腹をどついても、爪先を脛に叩き込んでも、ふうっ、と息が漏れるだけ。変態の癖にっ…

どんなに暴れても、私を閉じ込める手は緩まない。…逃げられないっ！

私、このままこの変態にどうにかされてしまうの…？

って、そんなやわで乙女チックな育ちしてないわ!!

右足を前に振り上げて、思いっきり後ろに蹴りあげる。

「うぐっ?!」

私の右足がびゅおん、と風を切ってやつの股間にキツイ一発をぶちかます。

変態の足が長すぎて、もしや届かない?と不安になったけど。

そこは火事場の馬鹿力。かなり前のめりになって、かかとでかっこよく決めるはずが、ふくらはぎで捉えましたよ。ぐにゅっ、と嫌な感触を。

奇声をあげる変態の腕から見事に解放された私は、その瞬間に脱兎の勢いで駆ける。

アパートの廊下を走り抜けて、階段を転がる様に駆け降りて。

んで、気がついたら。

アパートのピンクのドアの前にいた。表札は佐々木。

そうです。困った時の神頼み。神様仏様唯様なのです。

びんぽーん。

…。

びんぽーん。

……。

「まさか、不在？」

びんぽびんぽびんぽびんぽ「うるさいわぼけっ！」「ーん…

あ、いたのね。

軽く頭をどつかれてから、首根っこ掴まれて部屋の中へ。  
ねえ、何気にけっこっ怒ってる？

「で？」

ふかふかのラグに座り、テーブルに置かれた熱そうなココアに手を伸ばして。

案の定熱かったココアに、ひいひい舌を出していた私に、唯は冷めた目で問いかけてきた。

「…で、と申しますと？」

ぎろ、とアイコンマスカラバツチリの目で睨まないで。怖いのが当に。

「ご、ごめんね…まさかぴんぼん連打でそんなに怒るとは思わなくて…」

「違う」

「え？」

じゃあ、何でそんなに怒ってるの？

「昨日、学校で別れてからメールしても返って来ないし。夜に電話しても朝に電話しても出ないし。今までずっと連絡なかったから…心配してただけど？」

「……………はい？」

えっ？今の聞き間違い？

「ちょっと待って！私変態に捕まって、逃げて…外に出た時、唯と別れた時から時間変わらない感じだったよ？夕方でちょっと肌寒くて…」

慌てながら喋る私の話の内容を聞いて、唯の眉にしわが寄って、眼光が鋭くなる。

「…変態？捕まって、逃げた？…知恵里、それどういう事？」

「……………あ、…」

肩に手を置かれて、ぎゅううーっと力強く掴まれる。唯が怒ってる時によくする癖。地味に痛い。

「幸い、今日と明日はお休みだし？じーっくりお話を聞かせていたかどうかしら？」

唯の後ろに、どす黒いオーラが見える。

どうやら私、魔王を降臨させてしまったみたい。

仁王立ちの唯の前に、正座で冷や汗かきながら、私はかくかくしかじかで全て洗いざらい吐き出した。

「…と、まあ、そんな事がありました。以上です…」

私が話始めてから、ずっと口を真一文字に引き結んで、黙りこくる唯。

そんな迫力満点な彼女を、（正座してるせいで）上目遣いに伺う。

…やばいよ。魔王様オーラで可愛いお部屋がどす黒い雰囲気満載になっちゃってる。

「…以上、じゃないでしょうか？あなた、下手したら誘拐されてレイプされてバラバラ死体になってもおかしくなかったんだからね？！そこんところ、わかってるんでしょうね」

その言葉を聞いて、ふと思った。

私、こうして無事に五体満足でいられるのは、本当にラッキーだったんじゃないだろうか。

ニユースで誘拐殺人とか、暴行とかレイプとか、何があるかわからない時代だし。

ストーカーが被害者に危害を加えるとき、普通に有り得る事なんだろう。

そこまで考えて、ハッとする。

ストーカー。

私、ストーカーされてるんだ。……この、私が。

ひゅっ、と息を呑む。

身体がガタガタと震える。

「……つゆ、ゆい……」

言葉が詰まって、やっと絞り出した声は、ひどくかすれていた。

唯は、そんな私を切な気に見やる。普段は勝ち気な彼女の目は痛ましげに細められ、うっすらと涙が浮かんでいる。

「わ、わたし……っ」

伝えたい事があるのに、喉の奥に何かがつつかえた様に、上手く話せない。

「…っ知恵里！いいよ、無理に話さなくてもっ…」

座ったまま俯いてしまった私を、唯はぎゅっと、強く抱きしめた。

「ち、違うの！」

唯の胸にすがり付きながら、私は顔を上げて、口を開いた。

「私、かつ、彼氏よりも先にストーカーができちゃった！」

人って、あまりにも興奮すると身体が震えたり、喉がつかえたり、言葉が出てこなかったりするんだね。初めて知った。

目を輝かせ、興奮しすぎて頬を赤く染めた私は、唯の麗しい顔もまた、（怒りで）真っ赤に染まっていった事に気づかなかった。

怒りで戦闘力の増した唯様に、しこたま殴られました。「危機感が足りなさすぎる！」とか「泣きながら警察に駆け込んでもおかしくないレベルの話でしょうが！」とひたすら私を怒鳴りつける唯様。

ここまで自分を心配してくれるなんて…やっぱり持つべきものは親友だわ。と内心激しく嬉しい。

「ストーカー、か…」

ぼやん、とあの変態の顔を思い浮かべる。恐ろしくイケメンな癖に、言動が残念すぎる変態。

肉食獣みたいな目をしてて、私に息もできないようなき、きっ、…キスをしてきた変態。

ちよっとはにかみながら、大事そうにしまい込んであった婚姻届けを見せてきた変態。

「なんだか、あいつに殺されるって気は全然しなかったんだ。…貞操の危機は常々感じてたけど」

自分で言った言葉に、ふっと笑いが込み上げる。

そうなのだ。私、あの変態に嫌悪感とか、恐怖心とかをそこまで抱いていないみたい。

…やつを散々殴って股関節って全力で逃げ出しといて、何言ってるだつて思われるかもしれないけど。

だつて、この平凡で「恋愛？何それ美味しいの？」で生きてきて、最近やっと洒落っ気に目覚めて（と言つても他の女子の標準装備程度）おしゃれをし始めた私がだよ。

あらいやだ！ストーカーされてるんですつてよ！大阪のオバちゃんもびっくり。私、大阪のオバちゃんの標準装備の飴ちゃん、箱ごともらえるんじゃない？

と、まあおふざけをしたところで。

「その変態も普通じゃないけど…知恵里もなかなか普通じゃないわよね…」

溜め息をつきながら、呆れた目を向ける唯。

だつて、あの変態ぶっ飛びすぎてておかしいんだもん。

「私だつて、あんな体験しながらこんな間抜けな事言ってる自分に

びっくりだよ」

「こっちはその数倍もびっくりよ。あたしだったら、絶対警察に駆け込んでるね」

「でもさ、私最近不幸な事に全くといって良いほど、遭遇してないでしょ？それって、あの状態が後ろから守ってくれてたからなんだって！」

「あたしだったら、後ろ着いてこられてる時点でアウトね。むしろ、いつも後ろから見られてるって…気持ち悪いにも程があるわよ…」

目を輝かせる私に、唯は呆れた様に呟いた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3439y/>

---

助けてください。

2012年1月6日10時48分発行